



著：藍澤たすく  
イラスト：かもめ遊羽



#18

ぴよたん！

ハームライズ魔法学院の大聖堂の奥には20メートルはあろうかという巨大な青銅のガーゴイル像が2体ある。

それは先々代の学院長、ナルグ・グレンスタットが命を賭して封印した魔物の成れの果てであり、同時にナルグ自身の最終詠唱を封印の礎として封じ込めた秘蹟の徴でもあった。

そしてそんな学院には今もまことしやかに囁かれているひとつの伝説がある。

曰く、この学院どこかに隠された封印の秘密を手にした者は、ナルグの最終詠唱の力そのものを手にすることができると、……と。

だがこの50年の間、幾多の教師・生徒・魔法使い・冒険者・神学者らがこの封印を解こうと試みたが、誰一人としてその手がかりすら得ることはできなかったのだ……。

「しかし、あたしは気がついた！ 奴らが封印の秘密を手にすることができなかったのは、単に愚か者どもだったからだということに！」

紅いセミロングの髪を揺らしながら執弁するのはカミラ・ミュースだ。

魔法学院中等部の2年生で、容姿端麗・才色兼備な生徒会長も務める才女だが、ちよつぷり性格に難があるのが玉に瑕というのが学院内でもつばらの評判だ。

「確かに奴らは学院内をくまなく探索し、調査した！ 数々の記録からもそれは認めよう！ だが封印の秘密はそんなところにはなかった！ ……つまり愚か者どもはスタート地点からして間違っていたということだ！」

カミラはそこで言葉を切り、ぐつと拳を握りしめた。

そして、くつくく……と、さもおかしそうに忍び笑いを漏らす。

「なぜなら封印の秘密は、ナルグ・グレンスタットの愛する孫娘！ マリアンヌ・グレンスタットの中にこそあるからだ！」

カミラは目の前の少女をびしっと指さした。

「はにや〜？」

長く艶やかな金髪をサイドテールにまとめ、どこかまったりほっこりした少女——マリアンヌ・グレンスタット——は小動物のような動きでちょこんと首を傾げた。

「そう！ 古来、秘術の封印や宝の地図といったものは意外なところにこそ、その鍵があるもの！ つまり！ ナルグはお前の体のどこかに鍵となるものを刻んでいるはずよ！ たとえばタトゥーとかアザとかね！ それを今からこのカミラ様が直々に調べてやるから光栄に思う方がいいわよ！ あ〜はっはっは！」

「ちよつと、カミラさん、声大きいよ、他のお客さんに迷惑だよ〜」

試着室の外からメガネ男子であるマイクのおどおどした声が聞こえてくる。



「思わぬ陵辱タイムだったわ……」

がつくりと肩を落としたカミラは疲労困憊といった様子でストロベリーシエイクを啜った。

「思わぬ収穫だったわねえ〜♪」

大量に水着を購入したマリリーはご機嫌な様子でフィッシュバーガーを頬張っている。

「そうだったね〜、思わぬ収穫だったよねえ〜」

大量のお買い物袋を小脇に抱えながら、マイクは笑顔で器用にポテトをつまんでいる。

なぜか3人はショッピングモールの端っこのハンバーガーショップで、長閑なティータイムに入っていた。

「まさかおてんばなカミラさんがあんな色っぽい声を出して囁けるなんてあぶっ!」

カミラの裏拳がマイクの顔面にクリーンヒットして、彼は物言わぬ散となった。

(それにしてもマリリーの体……アザひとつ……いえ、ほくろひとつすらなかったわ……)

そう、カミラはマリリーに良いように陵辱……いや、翻弄されているように見えて、しっかりとマリリーの体をチェックしていたのだ。

「そうだよお〜。カミラちゃん、よおく考えてみて〜? おじいちゃんがガーゴイルを倒した時い〜、あたしはまだ生まれてなかったんだよお〜? だからあ〜あたしの体に何か残すよ

りい〜、愛娘であるお母さんに残す可能性がよっぽど高いと思わない〜?」

マリリーはカミラの心を読んだかのように、にこにこしながらそう告げる。その手にはすでにおかわりのペーコンエッグバーガーがしっかりと握られていた。

「そ、そうか! そうよね! え、えーと、マリリー? お母様は水着とか買いにいらっしやらないのかしら?」

「んー、残念だけど、お母さんにも封印の痕跡は何もないわよお〜、毎日お母さんとお風呂に入ってるあたしが言うんだからそれは間違いないだもん〜」

「そ、そうなのね……」  
がつくりと再びテーブルに突っ伏すカミラ。

その弾みでテーブルに置いてあった胡椒の瓶が倒れ、周りに勢いよく胡椒をまき散らした。

「ふわ、ふわ、ふわつくしよん!」

カミラが盛大にくしゃみをする。

その勢いで胡椒の粉がさらに舞い踊る。

「ふわ……ふわ……」

マリリーもたまらず鼻をむずむずとさせている。

「ふわ……ふわ……びよごたん!」

「は?」

「びよたん！　びよたん！」

「はあああ？」

突然キテレツな単語を繰り返し発するマリーにカミラは目を丸くする。

「んもー、ひどいよ、カミラちゃん。あともう1回くしゃみしちゃったたら妖精さんに連れていかれるところだったよお〜」

マリーはポーチから取り出した花柄のハンカチでいそいそと鼻と口許を拭っている。

「びよたんって……くしゃみ、なの？」

「そうだよお〜？」

「いやいやいや、どう考えてもおかしいでしょ？　無理矢理すぎんでしょ!?!」

「そんなことないですよ、カミラさん。確かにちよつと個性的ではありますが、マリーさんはむかしからこのくしゃみをしています。幼少の頃よりずっと付き従っているこの僕が言うんだから間違いありません、むしろカミラさんの先ほどの艶声の方がよっぽど無理矢理キヤラ作ってがぼっ!?!」

マイクはふたたび骸となった。

「そうだよお〜、カミラちゃん。あたしも、あたしのお母さんもずっと同じくしゃみだよお〜？」

「マリーの……お母さんも!?!」

カミラの目がキラリと光った。

「それだあああああ〜〜〜!!」

「あつ、カミラちゃん!?!」

カミラは何か憑かれたように突然学院の方にダッシュしていった。

残されたマリーとマイクはぼかんとした表情でただそれを見送るのだった。



「わかった〜！　わかったわよ〜！　まさかそんな封印の仕方があるなんてね！　さすが叡智の大聖者と言われたナルグ・グレンスタット！　やるじゃない！」

誰もいない大聖堂で一人大声をあげるカミラ。その向かいにはガーゴイルの像たちが物言わぬまま佇んでいる。

「ふふふ……いくわよ！」

カミラは両手を像に向かって突き出し、思念を集中した。

それに反応した魔素が彼女の両腕にゆつくりと七色の光を宿していく。

そしてカミラは厳かに口をひらいた。

「我はナルグ・グレンスタットの最終詠唱を継承するものなり。瞑する者よ、いざ開け。す

べての力の源泉なる門を。我はここに告ぐ、汝の封印を解き放つ禁呪を……」

「びよごたん!!」

カミラの透明なソプラノの声が大聖堂に木霊する。

それと同時にガーゴイルが立っている青銅の台座からゴゴゴゴゴという地鳴りのような音が響き始めた。

「台座が動いている……動いてるわ……!」

カミラは驚愕と歓喜の表情を同時に浮かべた。

きつと、きつとこの台座の中にナルグ・グレンスタットの最終詠唱の秘密が隠されているに違いない!

カミラは固唾を呑んでその様子を見守った。

……が。

「止まった?」

台座はわずか数センチずれただけで、またびくりとも動かなくなつた。

また台座の前身はまったく窺い知ることができない。

「えー!? なんでー!? なんでー!? この流れ、絶対『びよごたん』が封印の鍵でしょうがー! 開封の禁呪でしょーがー!!」

「もーひどいよーカミラちゃん、急にあたしたちを置いて行つちゃうんだもーん」

「そうですよ、ひどいですよ、カミラさん!」

いつの間にか大聖堂の入り口にマリーとマイクの姿があつた。二人ともここまで走ってきたのかはあはあ、と息を切らしている。

「もー、こんなに走つたらあー、マリー、またお腹すいちゃつたようー」

唇を尖らせて文句を言うマリーのお腹が……。「どんがどんつ」と鳴つた。

「えっ!」

カミラが目を丸くすると同時に、またガーゴイルの台座が動き始め……やはり数センチ動いたところでぴたりと止まつた。

「ま、まさか、今のはお腹がすいて『ぐう』と鳴るところを『どんがどんつ』なの……?」

カミラがわなわなと手を震わせてマリーに問いかける。

「もちろんそうですよ、カミラさん。マリーさんはいつもお腹が空くとこの音がくばあっ!」  
なんとなくイライラしてカミラはマイクをしたたかに殴つた。

特に反省はしていない。

「わかつたわ……さすがナルグね。手が込めるじゃない……。こうなつたらとことんまで付き合つてやるわ! マリー、ちよつとこつち来なさい!」

「えー、なにカミラちゃん? なんでもいいけどおーとりあえずなんか食べてからにしま

い〜?」

カミラに強引に手を引かれて大聖堂の奥に連れて行かれるマリーのお腹は相変わらず盛大に「どんがどんっ」していたのだった……。

3時間後。

カミラの丹念かつ緻密な検証によって以下の事実が明らかになった。

■マリアンヌ・グレンスタットが発する異音一覧

くしゃみ

びよごたん

空腹

どどんがどんっ

げっぶ

ふあーぬふあーぬ

おなら

ぎろんちよ

いびき

まらさぐるすて

あくび

げらいつひすたんどるて

口笛

みしよる

拍手

べそべそ

指の骨を鳴らす

ふあー!

「あなた、これで今までよく平穏な社会生活を送ってこれたわね……」

カミラの口を突いて出たのは偽らざる本音だった。これだけの怪音奇音を発しながら、なぜ今まで誰にもつつこまれなかったのか……。

「えー。だつてくしゃみとかあくびつて基本的に人前でなんかしないしい〜、お母さんも同じ音だったからあ〜別に変に思わなかったしい〜」

ニコニコと微笑むマリーに脱力感すら覚えるカミラ。

やはり大聖者の血を継ぐ者はどこか常人離れしているのかもしれない。

「ま、いいわ。とにかく今度こそ！ 今度こそ開封の禁呪が判ったわ！」  
カミラはきりつとした表情で再びガーゴイルに向き合った。

そしておもむろに詠唱を開始する。

「我はナルグ・グレンスタットの最終詠唱を継承するものなり。瞑する者よ、いざ開け。すべての力の源泉なる門を。我はここに告ぐ、汝の封印を解き放つ禁呪を。即ち、びよごたんどんがどんっふあーぬふあーぬぎろんちよまらさぐるすてげらいつひすたんどるてみしよるべそべそふあー!」

呪文のあまりのばかばかしさに正直途中で何度か心が折れかかったが、カミラは最後まで



しつかり詠唱しきった。

再び低い地鳴りのような音とともに台座がずれ、今度はそこから眩いばかりの光の奔流がほとばしった。

「まさか、この禁呪を探り当てる者がいようとはな……」

光の中から低く厳かな声が響いた。

「おじいちゃん……?」

マリーは思わずそう洩らした。

そう、光の洪水の中から立ち現れたのはまさにナルグ・グレンスタットその人だったからだ。「こうして会うのは初めてだな、マリー。だがすまぬ。ワシは人間ではない。ただ、ナルグ・グレンスタットがここに遺した思念の残留体に過ぎぬのだ。……そのそなた、名は何と申す?」

「はっ。わたくしはカミラ・ミュージズと申します」

ナルグの思念体に誰いがかたが片膝をついてそう応えた。

「そうか、ミュージズの血筋の者が。さもありなん。昔からあの家には切れ者が多くいたからな……ならばもうわかっているであろうな、我が最終詠唱の本当の姿を……」

ナルグ思念体は真つ白な顎髭をしごきながら、さらにカミラに問いかけた。しかしカミラは質問の真意が判らないため、沈黙を守ったままだ。

「そう、くしゃみやおならといった音は本当に近しい者、親しい者……つまり愛する者にしか聞く機会がないものじゃ。つまり裏を返せば、マリーのそれらすべてを聞ける者は、マリーの事を気にかけ、マリーの事を愛し、マリーを支える者ということじゃ。だからこそワシはこの音どもに封印の呪文を置いた」

(……いや、ただ単に最終詠唱の力が欲しかったただけなだけで、あたしは……)

自分に陶醉した様子でしゃべり続けるナルグ思念体を前に、カミラは身も蓋もないことを思った。

「つまり、ワシの最終詠唱の真の力とは………愛じゃ!」

「はあ!」

とんでもない結論に、カミラは大口を開けたまま、ナルグ思念体とマリーを凝視した。

「愛があればすべての困難は克服できる。愛さえあれば、何もなくとも全てを手に入れたのと同じ。つまりは、そういうことなのじゃ。そういうことなのじゃよ」

ナルグ思念体はうんうんと一人頷いた。

そしてマリーの方に向き直り、優しい笑みを浮かべた。

「良い友を得たな、マリーよ」



「はい、おじいさま」

「ふ……」

カミラは拳を握りしめ、ぶるぶると全身を震わせていた。

「ふっぞっけんなー何が愛だこのクソジジイ！ 最終詠唱<sup>ディセック・シャント</sup>って言ったら力だろぅがよ！ この世の全てを統べる<sup>す</sup>くらいに圧倒的な力だろぅがよー！ あたしの今までの血のじむような努力はこんな茶番劇を見るためにあつたんじゃねーぞばかやろー！ 力だ！ 力をよこせクソジジイー！」

カミラはナルグ思念体の胸ぐらを両手で掴みあげ、ぶんぶんと振り回した。

「ば、ばか、やめんか！ ワ、ワシはナルグ残留思念体であると同時にこのガーゴイルたちを封印した魔力の根源でもあるのじゃぞー！」

「そんなことあ、あたしの知ったこっちゃねーんだよ！ 力よこせー力あー！ くっそー、この最終詠唱<sup>ディセック・シャント</sup>詐欺！ 最終詠唱<sup>ディセック・シャント</sup>おれおれ詐欺いー！」

その時。

グウルルルウウウ……

「頭上から腹の底に響く<sup>ひび</sup>ような低い唸り声が聞こえた。

カミラとマリーとマイクとナルグ思念体が上を見上げると……そこには、封印を解かれ、青銅のしがらみから本来の己<sup>おのれ</sup>の体を取り戻したガーゴイルたちの姿があった。

その牙は涎<sup>よだれ</sup>ででたらと光り、その目は憤怒<sup>ふんぬ</sup>に充血して真紅に染まり、その爪は自分を不当に拘束していた者を引き裂ける喜びのためにぶるぶると震えていた。

「じゃ、じゃあ、ワシはこれで！ すべては愛！ 愛じゃぞー！」

言うが早い、ナルグ思念体は霧を晴らすかのように掻き消えてしまった。

「あつ、くそ、ずるいぞ、じじい！ 一人で逃げんなああああおわあああああああ！」

突然、カミラの横を紅蓮<sup>くれん</sup>の炎が駆け抜けていった。

それは一体のガーゴイルが放ったものだった。

その口の中にはまだ残り火がちろちろと光っている。  
圧倒的な炎の奔流<sup>ほんりゅう</sup>は一撃で大聖堂の半分を呑み込み、半壊した建材が崩れて粉塵<sup>ふんじん</sup>を巻き上げた。

「びよたん！ びよたん！」

「ほら、マリー、くしゃみなんかしてる暇ないわ！ 早く逃げるわよ！」

「まらさぐるすて……」

「やだこの娘、気を失ったー!?」

カミラの絶叫が響き渡ると、二体目のガーゴイルの火炎の奔流が放たれたのはほぼ同時の

ことだった……。。

おしまい